

JOAK、JOAK・・・

JJ1SXA 池

ご存知のとおり、東京市(当時は市)の芝浦にある愛宕山から「JOAK、JOAK、こちらは東京放送局であります」の第一声が放送されたのは、1925年3月22日のことで、出力は220W、サービスエリアは約40Kmだったそうです。

この本放送の3年前の1922年3月に、上野公園で開催された平和記念博覧会場と東京朝日新聞本社との間でニュースや音楽の実験放送が行われ、これが日本で最初のラジオ放送(試験放送)だったようですが、ちなみに、アメリカでは、ウェスチング・ハウス社というところが、アメリカ商務省の正式免許を受けて、最初のラジオ放送局となったのが、1922年11月と言いますから、日本も結構早かったんですね。

240グループの中で、年長から数えると10指に楽に入ってしまう私の生まれる10数年前の事です、終戦の玉音放送(相当古い hi)は1945年、これを聞いたのは田舎の小学生時代、東京放送局の本放送開始時からこの時までの年数は、私のアマチュア無線の経験年数よりも短い年月、無線技術の発達のスピードに驚きます。

東京放送局が本放送を開始した時の、国内のラジオの台数は約5000台、しかしその年の9月には75000台を超えたといわれていますが、それにしても貴重品。

当時、ラジオを聞くには、まず受信機の所持許可を逓信省(郵政省→総務省)に申請し、許可を受けて初めてラジオを所有することができ、更にラジオを聞くには東京放送局で聴取許可を受ける必要があったとのことで、2箇所から許可を受けたのです。

東京放送局の聴取許可は、現NHKの聴取料に引き継がれていますが、不祥事による不払い運動がおきているようで、この先どうなるのでしょうか。

アマチュア無線は包括免許にと言われて久しいが、受信機の所持許可が必要というのは、今も昔もお役人の頭の固さを感じます。(お役人の方ごめんなさい)

JARLは、1926年に誕生したようですが、こちらも随分早い時期の設立で、先人は、学問的にも優れ、かつ経済的にも恵まれた、選ばれた人たちのエリート集団ですね。

資料によると、米15Kgの価格が5円の時代の、当時の最新エレクトロニクス素材である真空管の価格は受信用の物でも1本5円～8円、一般の人はもっぱら鉱石ラジオを使用していたようですが、少数のアマチュア愛好家達は、わずかに出回っているアメリカからの技術誌や1924年発刊の技術雑誌、無線と実験(誠文堂新光社)などを参考資料に自分でラジオを作り始め、その後、この人たちは、いかに高感度なラジオを自作するか、あるいは自分で電波を発信したいと考えた人はアマチュア無線に進み、いかにラジオの音質を良くするかと考えた人は、後にオーディオ・ファンにと、大きく2つに分かれていったそうです。

日本のアマチュア無線は、「JOAK、JOAK・・・」を契機に発展したようなので、大いに「CQ CQ こちらは ジャパン～・・・」と大声を出した方が良いでしょう。